
僕の彼女は男の娘！？

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女は男の娘！？

【Nコード】

N8757X

【作者名】

ケン

【あらすじ】

この話は、男の娘な彼女と地味？な青年が彼女を男から女へと性転換させるために、突如見つけた異世界へと入りこみその方法を探しながら冒険をする物語です。

軽く思いつきで書いています

はじめて書く小説なので、おかしい文法や誤字脱字などが多数出てくる場合がございますので、ご指摘していただけるとありがたいです。

第一話 出会い（前書き）

はじめまして、初めて小説を書きます。

ほぼ思いつきで書いているので、更新頻度はめっちゃ遅いです。

なるべく早く更新は致しますが、学生なので大会やレポートが忙しく更新頻度はが劣るかもしれません

誤字脱字などがあればバンバン指摘ください

第一話 出会い

僕は地味な大学2年生

名前は高原優時「たかはらゆうじ」

ある日の昼休みに僕は告白された・・

「同じ講義を受けているあなたに一目惚れしました
私と付き合って貰えませんか？」カァー

その人は、キャンパスでも美人で有名な同学年の子で神立楓「かんだかえで」と言う

背がスラツと高く顔はカワイイと言うよりも、誰が見ても美人と思う整った顔立ち
髪は黒髪ロングで、清楚なお嬢様って感じかな（笑）

そんな彼女がいきなり僕に

（一目惚れしました??）

僕は軽く混乱した

なぜなら彼女は、キャンパスないで誰もが狙うキャンパス一のマドンナだったからだ

「なぜこんな地味な僕の事を？」

彼女はなぜかハアーツとため息をつくところだった

「あなたって案外ニブイのね」

「へえっ？」

僕は何が何だか解らず間の抜けた声で聞き返した

「だから、あんたは案外ね女の子からモテてるってこと（怒）」

「マジでっ？？」

「ええっそうよ」

「知らなかったー マジデエこの僕があ？」

「ハアーッ何テンション上げてんのよ」

だって入学してからイメチェンしたからって言うても、特に何もなかったしな

「だってこの僕が・・・」

もしかしてモテ期到??

あれなんか頭がクラクラするような

「だから返事はなによ教えなさいよ（怒）（怒）」

ガンガン

「ちょっと 力強すぎイタツイタいつ??」

ガシガシゲシ

そこには僕の肩を思いつきりゆらす神立の姿が

「答えるからストツーープつつ??
一旦落ち着いてからにしとい・・・」

「はぐらかすな（怒） コッチは死ぬほど緊張したんだ（怒）」

あれっなんか口調変わってない？

てかコエー

「わっわかりました？わかりましたから？？」 すうーハァー

「僕もこのキャンパスで初めて見た時から一目惚れでした」

「だからこんな僕でよければ付きあっ・・・」

「ほんとうに？」

「ええっ だから僕も一目惚れだったわけですし」

そこには、誰もが見入ってしまうほどの笑顔が咲いていた

「じゃあ今日から恋人同士だからゆうくんって呼ぶね？」

「えっ恥ずかしすぎるだろそれは」カー

「いいじゃんそれくらい」

いくらなんでも恥ずかしすぎだよ
だって恋人になってまだ少ししか経ってないのにいきなりその呼び方は

「じゃあこれから私のことは、かえでって呼んでね？」

「うん？　よしくな」

「か、かえで　よ、よろしくな」

恥ずかし――――

「ほら早く呼んでよ」

「.....」

こうしてチヨ一美人な彼女が出来て浮かれまくっていました

あることを、カミングアウトされるその時まで……

第二話 ぎこちない初デート前編

今日は、楓との初のデートだ？

「やっぱり緊張するなあ、服も髪もこんなんでもよかったかな？」

朝には、初デートだのなんだかんだ浮かれて居たはずの俺はどこに消えたのやら

待合の時間が近くなってきたら急に緊張してきてしまったのだ

「もうすぐ、待ち合わせの時間か・・・緊張する」

待っている間にいろいろなことを考えていた

（彼女は普段から可愛いくて、美人でモデルみたいな完璧だから
どんな服を着てくるのだろうか？

彼女は足が長いからパンツ姿だろうか？それともスカートで来るの
だろうか？

素顔がきれいだからいつも通りスッピンだろうか？

今思ってみたら彼女が化粧をしているところを一度も見ることがない

それより早く着きすぎたな)

などなど考えているとあっという間に待ち合わせ時間を
30分も超えていた

すると遠くのほうから、手を振りながら小走りで来る女性が

「ゆづくんめーーーーーーん」タッタッタ

「えっ！？か、かえでえ？」

「ハアハア　えっ何　ハアー　そうだけど」疲

「いやぁー化粧をした姿を初めて見たもんで

いつも綺麗でかわいいが、いつも以上に大人っぽく見えて

一瞬、誰かわからなかったんだよ？」

「ほんとに？　がんばって化粧をしてみてよかったあ〜」　パー

彼女の顔が輝いた

でもこれはお世辞でも何でもないんだ

ぼくは、本気で彼女のことわからなかったし

あらためて僕には不釣り合いなんじゃないかと思ったりもした

だけど彼女の輝いた顔を見たら、そんなことどうでもよくなった。

「それじゅあ、行きますか」

「そついえば今日は、何処に連れて行ってくれるの?」「ニコッ

「ああまだ言ってなかったね、今日はここに行こうと思うんだ」「ガ
シャペラペラ

「Weightlessness park」？「ドコソレ・・・」

「新しくできた遊園地だよ」

「なんて意味なの？？」

「無重力パークだよ」ニヤッ

「どーゆうー意味ですか？」

「単純に、日本で一番ふわりとくるジェットコースターや乗り物が多い遊園地だよ」

「何それ、面白そう 私、絶叫系大好きなの」ワクワク

「よかった」ホッ

内心彼女が絶叫がダメだったらどうしようよ

心臓がバクバクだったのだ

だから僕は、彼女が絶叫好きでよかった

一緒に乗れるし一人より二人のほうがいいにきまってる？

第三話 ぎこちない初デート 後編（前書き）

さて少し間があいてしまいましたね

あすは、弓道の大会です

マジでだるいです

第三話　ぎこちない初デート　後編

「まずは、軽い奴から乗ろうか」

「ええゝなんでえゝ？　アレから乗ろうよ」

「ダメだ？　だつて考えてみるよ」

あんな奴から乗ったら、他のが怖くなるじゃないか？？」

「ああ　ソウデシタ」アハハ

「こんなのへっちゃらだな」ニヤッ

「ふふ」「ふふ」

「何が怖くないよ？」

結構来るじゃないコレ（怒）「

「そーだったな」アハハハ

意外と怖かったな でもこうなったらどれが一番か

全部乗って確かめてやる

「これがこんなに怖いなら、どれが一番か確かめてやるわ」

彼女も同じ考えだったんだ・・・

「ホラ行くわよ つぎはアレ？」

「あのお~~~~そろそろ休憩にしません？」

「そうね、おなかも減ったことだし休みましょう」

そして食いすぎた 午後も絶叫三昧

回転系で僕は、ついに気持ち悪くなり やらかしたけど

特に何もなかった

そして、最後に乗るのは観覧車でしょっと同意見だったため

ただいま観覧車に乗車中

「今日は、ありがとう とっても楽しかったよ

またデートで連れてきてね？」

「そんなのお安い御用さ、それよりさ・・・

観覧車といえはあれじゃない

そのアレだよ」「テレテレ

「・・・」チュ

「えっ」

「本当は、あなたからして欲しかったんだけどな〜」

私のファーストキスよ ありがたく受け取りなさい」「カァ〜

「もちろんだ」

それからは恥ずかしすぎてまともに話すことが出来なかった

はじめてであったころに戻ったみたいな感じだった

「わたしのうちはここだから　また明日」

「ああ　またな」

やべーニヤニヤがとまんねえー

彼女の初キスゲット　俺も初だけど

でも明日からも普通に学校まともに話せるかな

まあいいか

第三話　ぎこちない初デート　後編（後書き）

人物紹介

たかはらゆうじ
高原優時

性別　　男

身長　　178cm

顔　　　さわやか系

性格　　結構静かな感じ　だが絶叫マシンや激しいものが好きだ
つたりもする

かんだかえで
神立楓

性別　　男の娘（現段階では）

身長　　170cm

顔　　　かなり整った顔立ち　めっちゃ美人　黒髪ロングヘア

性格　　元気でボーイッシュ　主人公一筋で純粹　たまにテンションが異常な時もあるかも

第四話 順風満帆からの衝撃告白（前書き）

来週からめでたくテスト習慣に入るため完全更新停止となります

第四話 順風満帆からの衝撃告白

彼女との初デートから半年ほどが過ぎようとしていた

初デートでおどおどしていた俺はいなくなり

次第に彼女をリードしていくようになりだした

「よお？ おはよう」

「あつ ゆうくんおはようー？」

相変わらず仲は、いいままだ

このまま結婚かな ↑妄想

「今日はどこに行く？」

「ねえ優時い」

「ドキッ……な、何？」バクバク

楓が俺のことをゆうクンではなく優時と呼んだ

初めてフルで呼ばれた気がする

なんだろう 不安だ

「実はこのデートの後に大事な話があるんだ・・・」

「うん・・・」バクバクバクバク

えい~~~~~大事な話って何

ま、まさか・・・・・・・・別れ話？

い、イヤ、いやだぁ~~~~~

違うよな・・・・・・・・うんちがう・・・・・・・・絶対に違うもんね

「じゃあいこっか」

「う、うん（大事な話マジで気になる）」

「うわーアレ見てすごくない？」

「うん」

「ねえーペンギンだって・・・うわぁー赤ちゃんだチョーかわいい」

「・・・・・・・・・・」

「イルカショーがもうすぐ始まるって見に行かない？」

「聞いてるの(怒)」
「スシッ」

「・・・」

「ねえ」

「・・・」

「あたっ なっ、何？」

「あなた何も聞いていなかったのね・・・だから

イルカショーが始まるから見に行かない？って聞いたの？」

「あっ そう言えばそんなのもあったねえー」

「で・・・行くの？行かないの？どっち

「じゃーいくか

なんだろうきになるなあ

「ねえーゆうクンどーしたの？　なんか上の空って感じ」

「いや何でもない」

「もしかして朝のこと？」

「.....」

「.....」

「.....」
「.....」

「.....」

「落ち着いて聞いてね・・・実は、私はいや僕は男なんです?？」

「はっ? えっ!? お、男」ポカーン

「今まで黙っていてごめんなさいでも僕・・・いや私は
一人の女性としてあなたが好きだったから

嫌いななられて別れるのがいやだったから

グスッ・・・ヒック・・・うう・・・黙ってて

エグッ・・・ごめんなさい・・・うう」

「
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
ダキッ

「
えっ?
」

「俺がそんなことでわかれると思ったか?
俺たちの愛がそんなにも軽いものか?」

「
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
」

「それは違うね・・・俺はこの半年間本当に楽しかったし

これからもこうやってやっていきたいし

な、なんて言うか・・・好きだ？

どんなことがあってもこの気持ちは変わらない

だからあらためて僕の彼女になってください」「ニコッ

「うう・・・あ、ありがとう・・・うん

・・・ゆるいぞ」

そして僕たちの一難が去った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8757x/>

僕の彼女は男の娘！？

2011年11月20日17時45分発行